

伊吹町文化財調査報告書 1

# 弥高寺跡調査概報

昭和61年 3月

伊吹町教育委員会

伊吹町文化財調査報告書 1

# 弥高寺跡調査概報

昭和61年 3月

伊吹町教育委員会

## 序 文

古く本朝七高山の一とされた伊吹山は、説話・伝説に富み、近年各方面からの関心も次第に高まりをみせています。しかしこれが学術的な調査研究は極めて立ち遅れており、積極的な対応が期待されていたところではあります。

たまたま弥高百坊跡が盗掘にあったことから、幸いにも国・県の助成・指導を得て遺跡分布調査をすすめ、ここに調査概報をまとめることが出来ました。調査対象の現地は、標高700メートルの山地であり、地域の広大さに加えて厳しい自然条件のため難航し、今後更に継続調査の必要に迫られております。

本調査によって幻の伊吹山寺の存在が確認され、その全容が徐々に明らかになって来たことは、本町の町づくり構想へ一つの示唆を与えるものであり、同時に町民一人一人の生きがいに通ずるものであってほしいと念ずると共に、引継ぎ御支援・御協力を御願する次第です。

昭和61年 3 月

教 育 長 伊 富 貴 豊

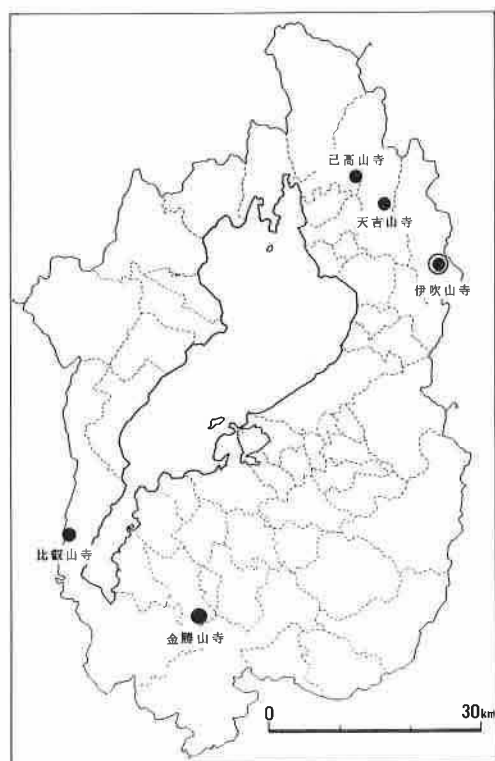
## 例 言

1. 本書は伊吹町が昭和60年度に、国庫補助金と県費補助金を受けて実施した伊吹町町内遺跡分布調査の一環として、弥高寺跡の調査を行った概要報告書である。
2. 調査は伊吹町教育委員会が主体となって、滋賀県教育委員会文化財保護課の指導を受けて実施した。
3. 調査にあたっては、地元の下記の方々をはじめ多くの協力を得た。  
堀井重夫、山川 悟、中辻英夫、山崎仁生、藤敦秀剛、山崎正文、橋田仲次、高木弘治、岩山礼一、松尾正太郎
4. 現地調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師用田政晴の指導のもとに、伊吹町教育委員会社会教育課社会教育主事膽吹邦一、福永圓澄が主体となって実施した。  
調査組織は以下の通りである。

伊吹町教育委員会

教 育 長 伊 富 貴 豊  
教 育 次 長 丸 岡 善 三  
社 会 教 育 係 長 山 本 忠 明  
社 会 教 育 主 事 膽 吹 邦 一  
福 永 圓 澄

5. 本概要報告は用田が担当した。



第1図 近江の主要な山岳寺院

## 目 次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	1
3. 分布調査	4
全体構造	5
本坊跡	5
門 跡	9
大門跡	11
行者谷	12
墓地跡	17
4. 試掘調査	20
5. 弥高寺跡の評価—山岳寺院の一類型—	30

## 挿 図 目 次

第1図	近江の主要な山岳寺院	例言
第2図	遺跡位置図	2
第3図	弥高寺跡測量図	4・5
第4図	本坊跡付近	6
第5図	門跡付近	10
第6図	大門跡付近	12
第7図	池を備えた坊跡付近	13
第8図	行者谷付近	14
第9図	本坊跡背後調査地区	18
第10図	T1南断面図	20
第11図	T2南断面図	20
第12図	鉄釉三耳壺出土状況	21
第13図	T3遺構図・断面図	21
第14図	出土遺物	24
第15図	表採遺物	26
第16図	浅井町大吉寺跡本坊付近	30
第17図	大原観音寺文書432号文書	31

## 1. はじめに

伊吹山（標高1377m）は滋賀県と岐阜県境にそびえる近江一の高峰である。

古くから山岳仏教の聖地として知られ、平安時代には比叡山、神峯山、金峯山などと共に七高山の一つに数えられていた。伊吹山の南に張り出した尾根上に建立されていた弥高寺は、地元では弥高百坊と呼ばれ、数多くの坊跡と思われる郭状遺構群は町の史跡に指定されている。標高約700mを計り、平地からの比高差も約400mあることから、比較的遺構は良好に遺存しているが、昭和に入り、伊吹山腹での大規模なセメント用石灰岩採掘やスキー場等により弥高寺を含む伊吹四大寺のうち、2つはその所在地さえも不明になってしまい、雄大な伊吹山の山腹をあらわにしてしまった。

加えて、弥高百坊においても「本坊跡」と呼ばれる中枢遺構の背後の山腹にあった墓地群が、たび重なる陶磁器目当ての盗掘にあい、蔵骨器のかけらと五輪塔・石仏などが散乱した状況にあった。

こうしたことから、弥高百坊と呼ばれる弥高護国寺を中心とした伊吹四大寺の分布調査と盗掘の後始末を手はじめに、平野部にも迫り来る諸開発に備え、伊吹町内の詳細な遺跡分布調査を伊吹町教育委員会において昭和60年度から実施することになった。

ここでは昭和60年度に行った弥高寺跡の分布・測量調査と一部試掘調査の成果をとりあえず概報として報告することにした。

## 2. 位置と環境

俗に言われる伊吹四大寺は、伊吹山の山腹に、仁寿年間（851～854年）三修によって建てられた伊吹山寺が展開していったものを指し、弥高寺あるいは弥高護国寺は、後のその関係寺院の一つにすぎない。しかし、その位置や現在知りうる限りにおける規模・内容から、ここが伊吹山寺、あるいは伊吹四大寺の中心をなすことは間違いのないことと思われる。

伊吹山は、膽吹山、伊富貴山、伊服岐山、夷服岐山とも書き、近江盆地の北東部の岐阜県境に位置する。そして、この石灰岩と花崗岩質からなる山塊をもって、中部地方と近畿地方を分けている。

伊吹山からは、東は関ヶ原から美濃・尾張を望み、西は湖東・湖北をはじめ、琵琶湖の向こうに湖西もうかがうことのできる近江の東の要に位置する。言いかえれば、近江の主要な平野部においては、どこからも伊吹山を望むことができ、特に、冬季は、日本一の積



第2図 遺跡位置図 (1. 弥高寺跡 2. 観音寺跡推定地)  
(3. 太平寺跡推定地 4. 長尾寺跡)





弥高寺跡遠望

雪記録を誇るほどの多雪地帯であるため、しばしば雪をいただいた雄大な姿を古くから人々の目に写してきたものである。従って、山岳崇拝の対象の一つであったことも当然のようになづけるのである。

伊吹山は、いくつかの急峻な支尾根を裾に広げているが、南の中仙道、現在では東海道本線・名神高速道路の走るわずかな近江と東国を結ぶ狭い平野部に向かって伸びている支尾根が、その中でも、眺望といった点では、極めてすぐれている。

弥高寺跡は、その支尾根上の標高約650～750mを計る場所に残る。山裾にある現在の弥高集落からは、幅1mばかりの蛇行する山道を通常の足で、1時間余り登ったところであり、逆に伊吹山山頂から下ってくると、角度をかえてややゆるやかになった地点に位置する。

伊吹山寺あるいは、弥高寺に関する沿革等については、すぐれた論考がすでにいくつかあり、<sup>11)</sup>詳しくは、それに譲ることにするが、ここで簡単に整理しておくことにする。

『三代実録』元慶2年(878年)2月の条には、仁寿年間(851～854年)僧三修が七高山の一つの伊吹山に登り、「一精舎」を建てたとあり、その後、「堂舎」が増え、元慶2年2月13日に、国家公認とでも言うべき定額寺に列せられたという。従って、この頃には、寺院

として、規模も内容もある程度整備されたものであっただろうと推定される。

次に弥高寺に関する記録は徳治3年(1308年)までとぶ。同年4月10日、「伊福貴山弥高太平両寺衆僧和与状」(『観音寺文書』)によると、弥高・太平両寺の間に本末寺の相論があったことがうかがえる。この頃、伊吹四ヶ寺のうち、この両寺が最も勢力を誇っていたと思われるが、主導権をにぎっていたのは、あくまで弥高寺であったという説もある。<sup>(2)</sup>

また、嘉暦2年(1327年)正月22日、後醍醐天皇からの令旨が伊福貴社に届き(『観音寺文書』)、その中に、弥高・長尾・観音寺の名が見える。

弥高寺は明応8年(1499年)正月24日焼失、再建後、永正9年(1512年)6月兵火のため焼失したというが、天文5年(1536年)5月の「伊富貴大菩薩奉加帳」(『伊夫気文書』)、天文9年(1540年)「伊吹三宮奉加帳」(『伊夫気文書』)には、まだ弥高寺の坊名が見られ、寺は何らかの形で存続していたようである。

結局、天正8年(1580年)山の西麓へ移ったと言われ、現在では天文5年の奉加帳にある悉地院が、弥高寺の法灯を伝えているのみである。

四ヶ寺のうち、他の寺院も、正元年中(1259～1260年)に、現在の山東町朝日に移った観音寺を除いて、遅くとも江戸時代には衰退してしまったようである。

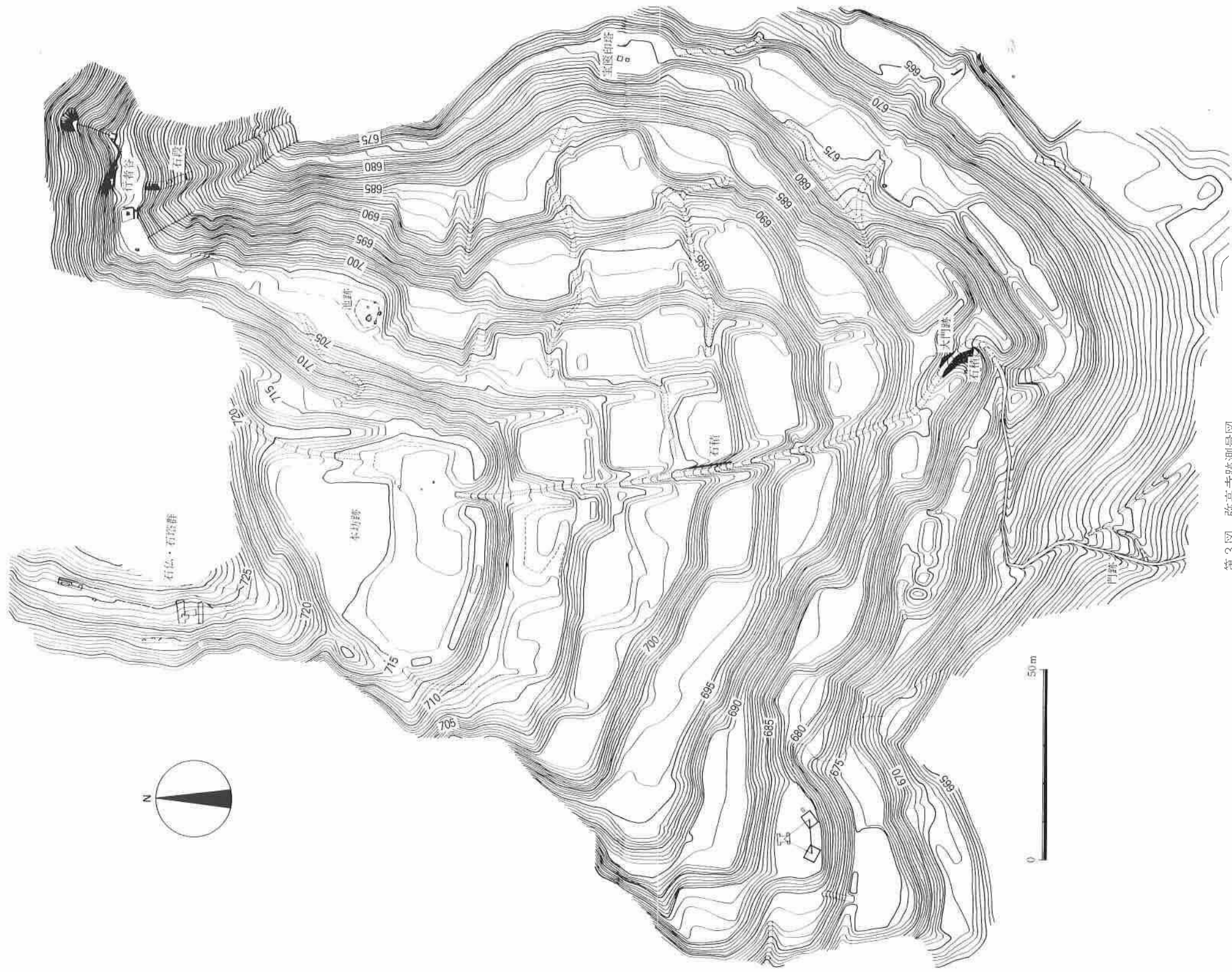
なお、弥高寺の「本坊」跡は、登記簿上、周囲が山林であるにもかかわらず、地目が宅地になっており、かなり新しい時期まで何らかの建物が残っていたのではないかと推定されるのである。

現在、長尾寺跡は、伊吹町大久保に知られているが、観音寺跡、太平寺跡の詳しい位置は石灰岩採掘等により、不明であるといわざるを得ない。

### 3. 分布調査

調査は、昭和60年5月30日、測量範囲を確認する為、弥高寺跡周辺を踏査することから開始した。また、近年、盗掘を受けた個所を確認し、散乱していた蔵骨器と思われる陶器片を採集した。並行して、この盗掘を受けた墓地跡と思われる地区において試掘個所の設定を行った。

測量範囲は、南端の門跡と思われる山道の西側に石を積んだ個所付近から、山の傾斜はゆるやかになり、その付近から坊跡と思われる郭状遺構群が集中するため、その門跡から上方を範囲とした。



第3图 弥高寺迹测量图

一方、本坊跡の背後は細い尾根がつづき、自然地形がつづくが、本坊跡から100mばかり登ったところに、かなり大規模な堀切状遺構があり、石仏が一体、頭をのぞかせていた。この付近まで測量を行う必要があると思われたが、工程等の関係から、今年度は郭状遺構が集中する範囲までとし、本坊跡の裏の部分は次年度以降に追加測量することとした。

**全体構造** 坊跡群は東西約250m、南北約300mの範囲に集中し、本坊跡を頂点として下方へ広がる。

現在までに確認したところでは、本坊跡も含めて56の坊跡が残る。本坊跡を別にする、60×13mを計る長大なものから、11×7m程度の小さなものまでであるが、20×15m程度のものが大半を占める。そのほとんどが、坊跡の長辺を等高線にそろえてあるため、中ほどから西側の坊跡は東西方向に並び、東側は南北あるいは北東・南西方向となっている。

門跡および大門跡から本坊跡へ至る道を中央の道とし、坊跡相互は複雑に入り組んだ道により結ばれる。また、行者谷から石段を下り、現在、宝篋印塔および五輪塔が残る坊跡へ至る道があるが、この道をもって東の限りとしており、西側は急峻な斜面でもって遺構群は終る。

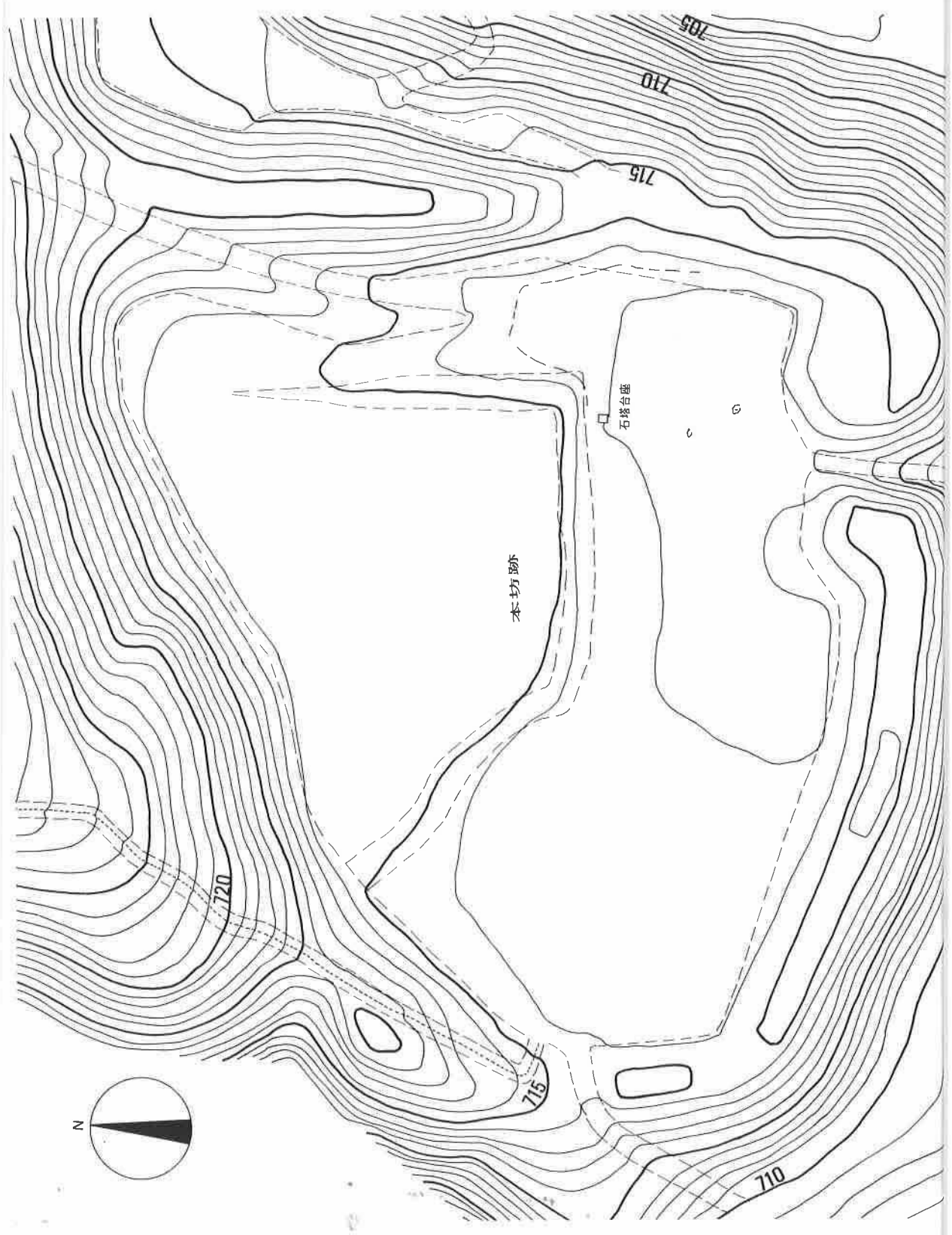
本坊跡から背後・上方へ至る道は2本ある。1本は本坊跡の東奥から伸び、上方の犬がかりな堀切状遺構に至る道。もう1本は西側土塁上を登り、石仏・石塔群の遺存している墓地跡を経て水の手谷へ至る道がある。

なお明確な土塁は、本坊跡とその周囲、および中央の道の西側に残るだけで、多くの郭は土塁を備えていない。

**本坊跡** 本坊跡と呼ばれる大きな郭状遺構は、坊跡群のほぼ頂点に位置し、標高714m地点にある。ほぼ南面し、東西辺および南辺には北から張り出た自然地形を利用し、それに続ける形で土を盛るなどして基底部幅3.0~4.0m・高さ1.0~1.5mの土塁がめぐる。

土塁は南辺中ほどやや東寄りとし、西辺中ほどが切れ、下方の坊跡群へとつながる道が取りつく。

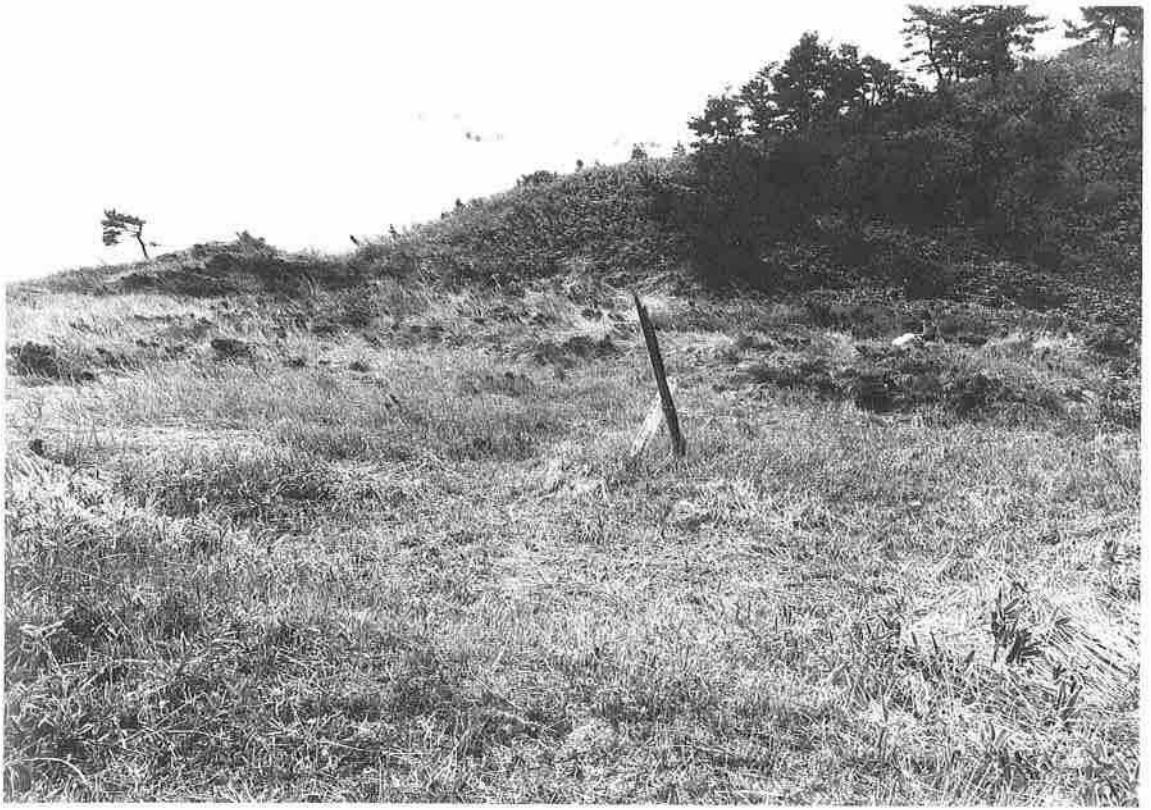
更に上方へは、北東隅と西辺土塁上から2本の幅1m足らずの道が伸び、特に西側の道は盗掘を受けた墓地跡へと続く。また東辺にも行者谷へ至る道が残るが、その部分は土塁が切れておらず、本来の道かどうか疑わしい。



本坊



本坊



本坊跡 (南東から)



本坊跡 (北西から)



坊跡群 1 (本坊跡から)



坊跡群 2 (本坊跡から)



## 門 跡

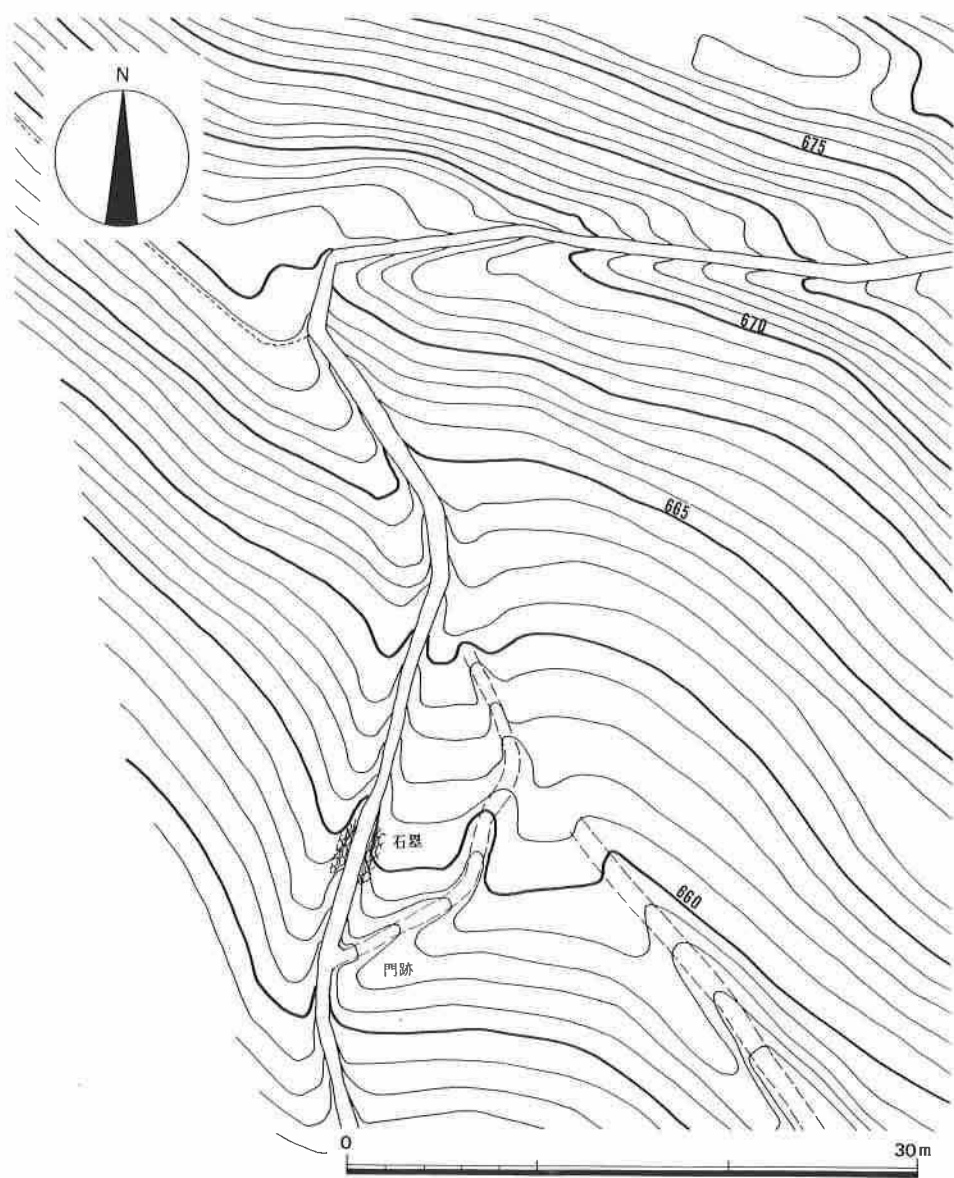
本坊跡は土塁を含めて最大東西幅約68m、最大南北長約59mを計る台形状の不正方形を呈する。本坊跡の北半には、一段高くなった部分があり、何らかの建物基壇跡に似る。高さは約1mあり、その基壇状遺構の東辺はほぼ主軸（南北方向）に沿うが、西辺は主軸とかなり斜交するように伸びている。

仮に、基壇状遺構の南辺と東辺を生かすなら、最大、方18m程度の建物が想定できる。

本坊跡には一辺60cmの石塔台座と思われる切石（図版）と2個の自然石が見られるのみで、礎石等は確認されなかった。

門 跡 麓から山道を1時間余り登ってくると門跡に至る。ここから傾斜がゆるやかになり、幅1mほどの道の両側には、人頭大の山石を1mばかり積み上げている。この石積は長さ3mほどに渡っており、ここを1つの門跡と推定した。またその3mほど手前に、この石積を避けるようにう廻る山道との分岐点があり、約50cm大の山石が1個、目印の





第5図 門跡付近

ように遺存していた。

この付近から山道はゆるやかになり、約90m先へ行ったところに大門跡と呼ばれているところがある。



大門



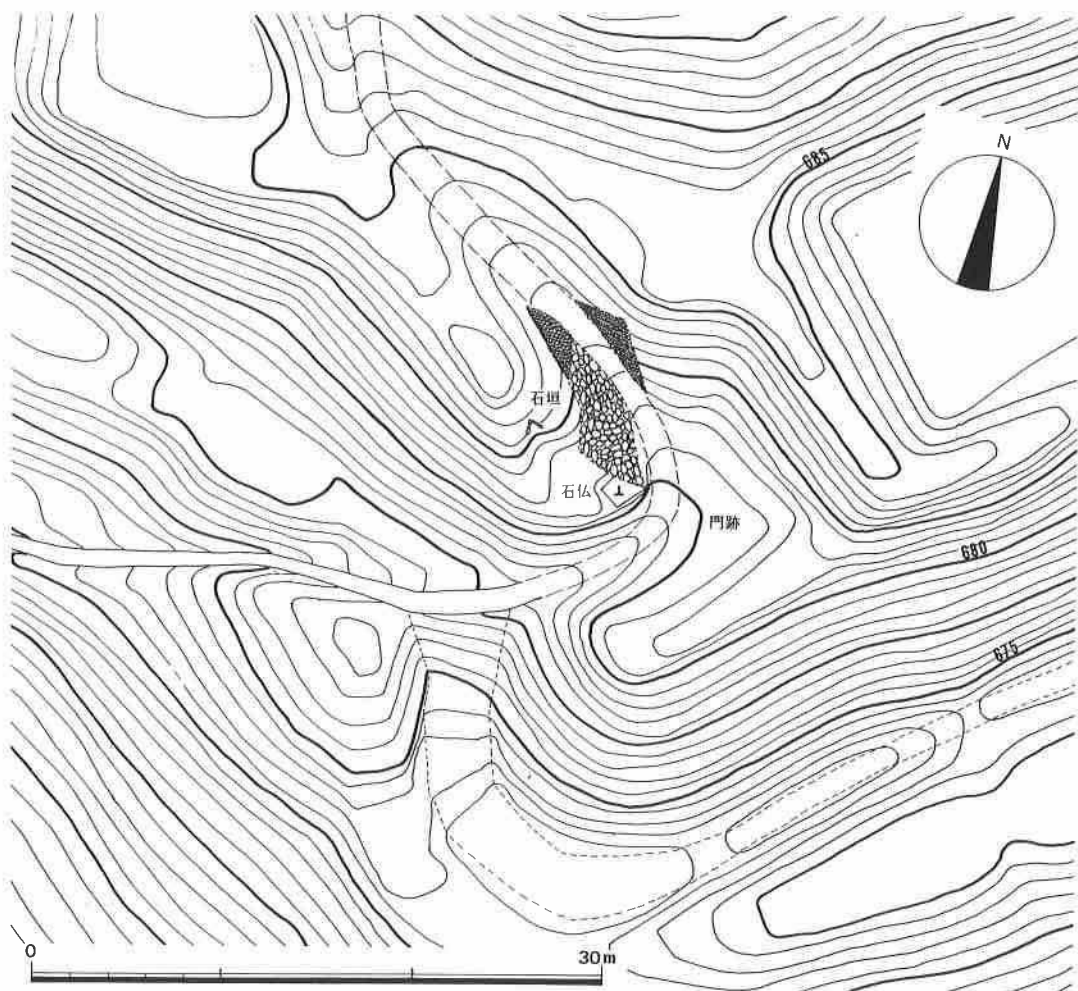
大 門 跡

**大門跡** 大門跡の手前まで道は東へ向っていたものが、鋭角に北西へ折れ曲る部分を地元では「大門」と呼んでいる。上方へ向って右手に土塁が張り出し、左手に石仏および五輪塔が乱雑に並ぶ。そして両側に30~50cm大の石が散在しており、もとはきっちりと積まれていたものと思われる。

この現在使われている道とは別に、大門跡手前で南から登ってくる道がある。この道は大門跡の張り出た土塁の横で、現在の山道に取り付くが、このルートをとると、その形態はまさしく中世山城の虎口状を呈する。

西側に石が散在する部分は、左手にも土塁が上方から張り出し、深いV字状の地形の底を道が本坊跡へと向かう。

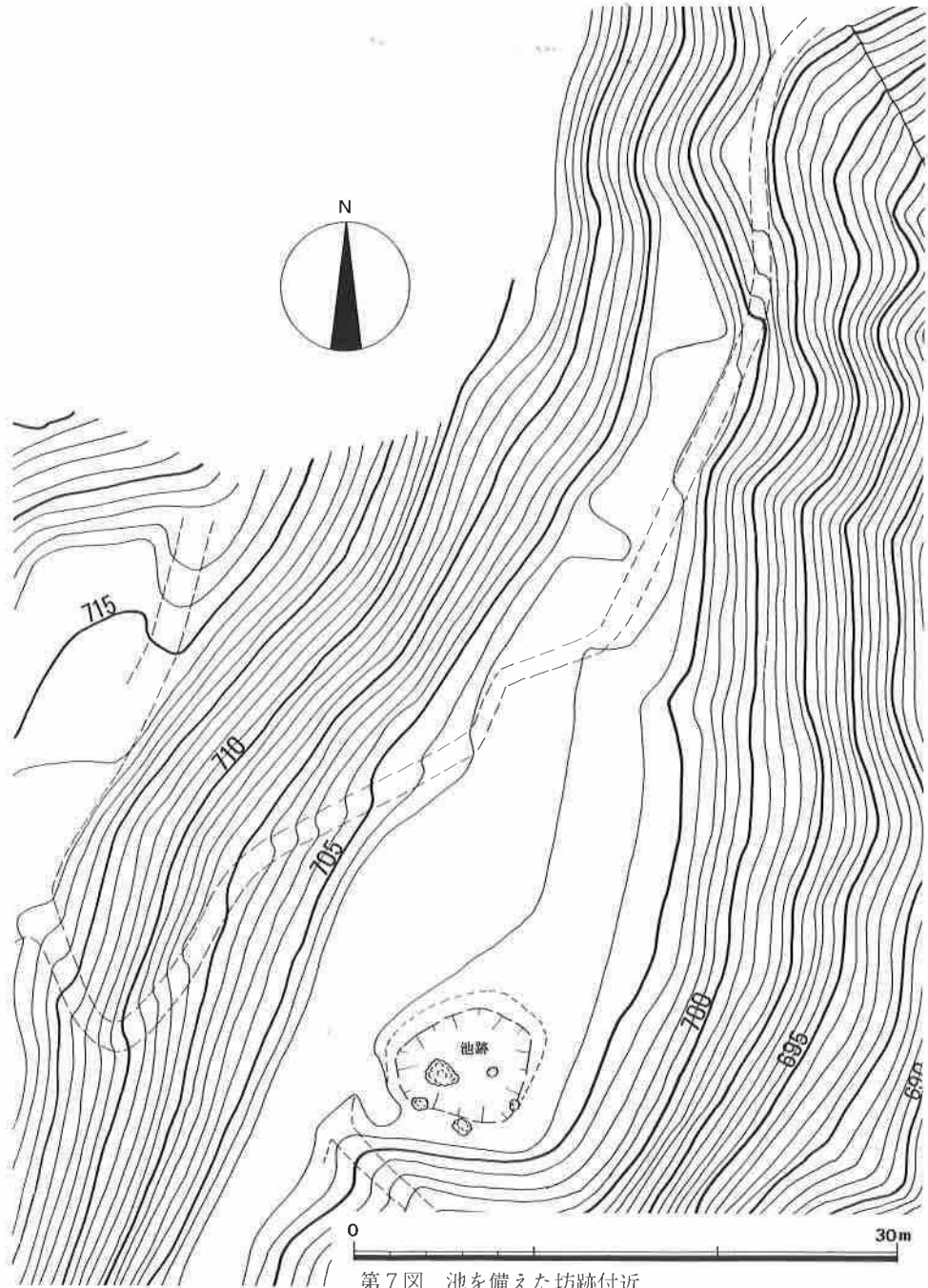
この大門跡の先を道はやや北へ角度を変え、そこからは本坊跡まで一直線で約 120m を計る。



第6図 大門跡付近

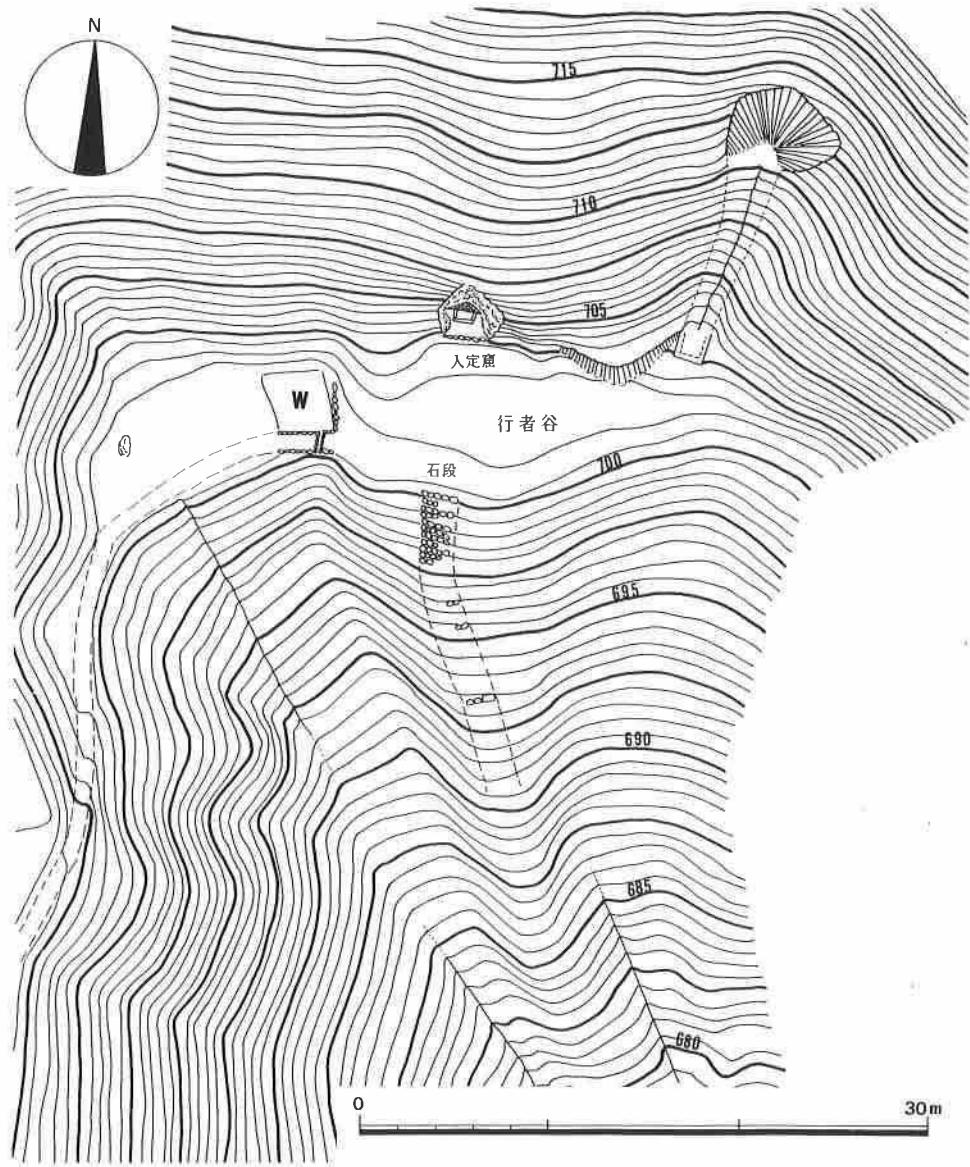
**行者谷** 本坊跡の東辺から東方向へ下る道がある。やや蛇行しながら下ると、細長い郭状遺構に至る。その郭状遺構は南端に径9mの浅い落ち込みがある。自然石を4個配し、行者谷部に近い水を得やすい位置にあたるため、これを池跡と考えた。このことは後に触れる浅井町大吉寺跡の「元池」の寺院中に占める位置に酷似する。

本坊跡から池を備えた郭状遺構へ続く細い道は、更に北の谷部分へ向う。ものの20mも北へ進むと谷の一番奥まったところにある平坦地に至る。この谷部分を地元では「行者谷」と呼ぶ。



第7図 池を備えた坊跡付近

東西幅約35m、南北の奥行きは5m程度の細長い郭状遺構で、ここには中ほどに現在も水を溜める池が残る。一辺3mほどの平面隅丸方形形状を呈し、深さは約50cm、二辺に石を



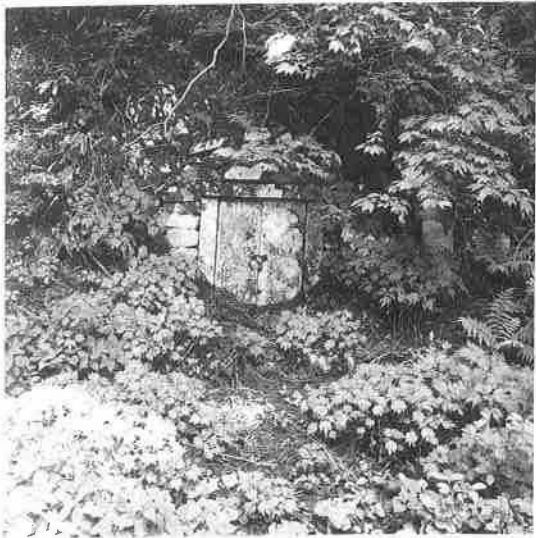
第8図 行者谷付近

並べ、谷の下方へ向っての排水溝も人頭大より少し小さめの石で組んで取りついている。

この池の東に「入定窟」あるいは「石室」と呼ばれる石窟が山腹に設けられている。切石を組んだ小窟で、人がかがんでようやく入れる大きさであり、内には役行者の陶製像が安置されている(図版)。



宝篋



石室入口



石室内役行者像



行者谷池



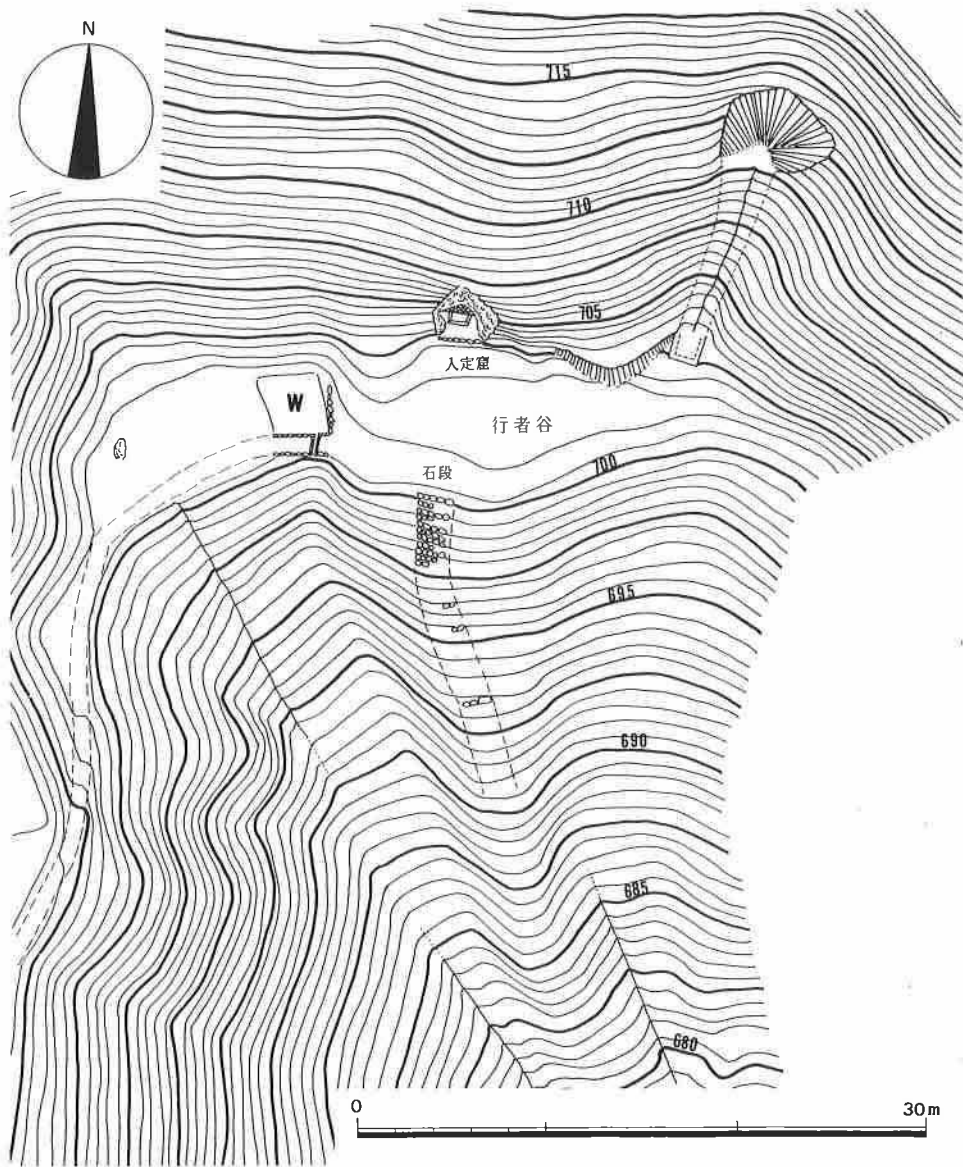
行者谷池排水溝



宝篋印塔



五輪塔

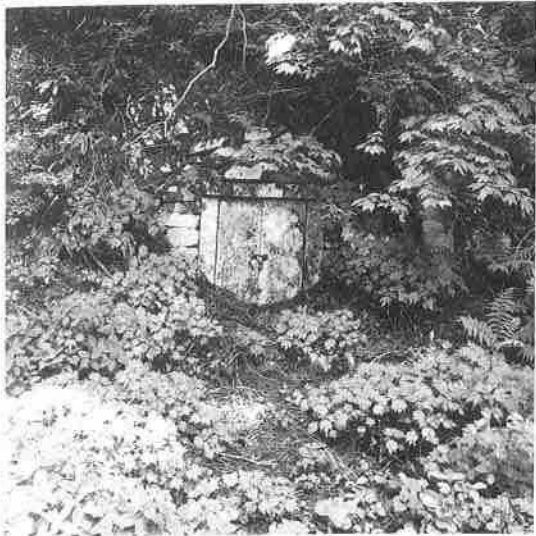


第8図 行者谷付近

並べ、谷の下方へ向っての排水溝も人頭大より少し小さめの石で組んで取りついている。

この池の東に「入定窟」あるいは「石室」と呼ばれる石窟が山腹に設けられている。切石を組んだ小窟で、人がかがんでようやく入れる大きさであり、内には役行者の陶製像が安置されている(図版)。





石室入口



石室内役行者像



行者谷池



行者谷池排水溝



宝篋印塔



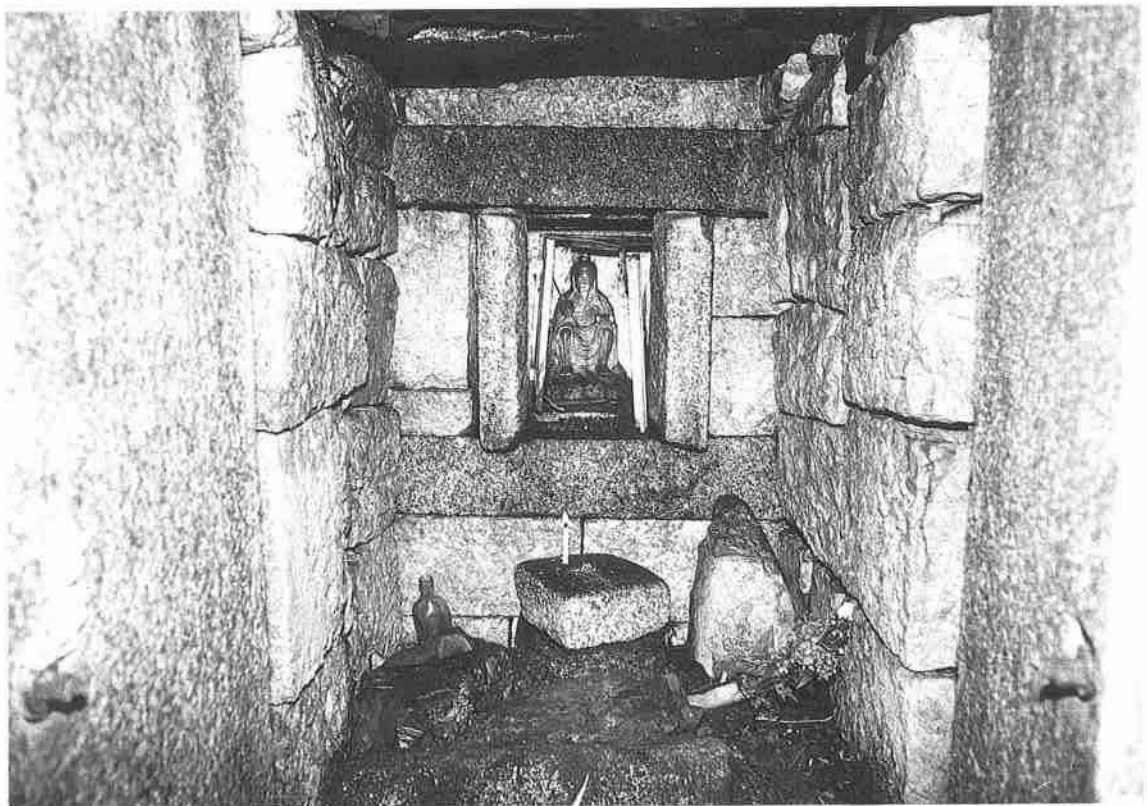
五輪塔



更にその東約10mに一辺2mほどの基壇状を呈する部分があり、以前ここに後述する弥高寺跡の南東部にある宝篋印塔があったのだという。<sup>13)</sup>

入定窟の前から石段が下方に向って設けられている。これは人頭大の石を並べてつくられており、10段余り遺存しているが、その下方にもいくつか痕跡が残り、約25m下の道へ至るものと思われる。下方の道を西へ向うと、もと行者谷にあったという宝篋印塔が残る郭状遺構へと至る。

ここは全体の中では東の端にあたり、すでに『改訂坂田郡志』第3巻で紹介されているが、部分を欠く宝篋印塔と高さ138.5cmの五輪塔の他、高さ48cmの一石五輪塔が遺存していた。



石室内部

**墓地跡** 本坊跡の西辺には北から張り出るようにある自然地形を利用した土塁がある。この土塁上を北へ向う道があり、本坊跡から約50m進むとわずかに道が幅広くなる地区に至る。

この部分は大がかりな盗掘を近年に受けた部分で、現地に入った時はすでに地元の人々の努力により、石仏や五輪塔などは整理されており、蔵骨器片もまとめられていたが、かなりの盗掘坑があちこちに穿たれていた。現地には盗掘者の草刈り鎌が10本程残されており、大がかりな盗掘を受けたことを物語っていた。

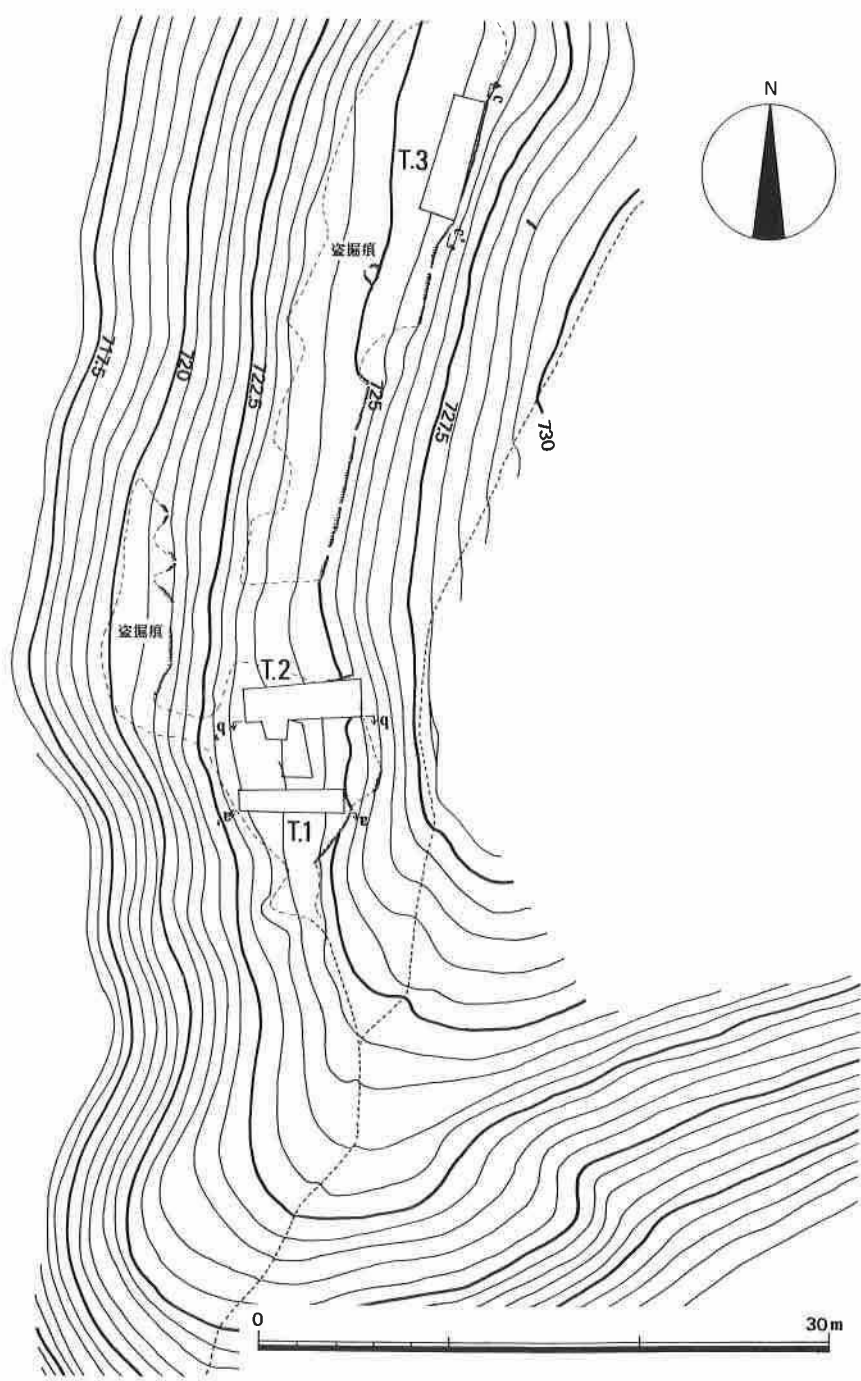
この地区は厳密に言うと完全な平坦地ではないが、幅約4mほどのやや平坦な部分が細長く約50mに渡って南北に伸び、部分的に約3mの高低差をもって2段となる。

この細長い墓地跡の西辺は、盗掘坑での観察によると、10~40cm大の山石で3・4段積みまれている（図版）。

墓地跡に遺存していた石仏・石塔群は、五輪塔の宝珠・請花26、笠19、塔身16、基礎72、石仏・五輪塔板碑26および一石五輪塔が2基からなる。石材の多くは花崗岩製で、白っぽい粒の荒いもので、伊吹山系産と思われる。他は堆積岩系であるが、五輪塔板碑のうち1基だけ笏谷石かと思われるものが認められた。

石仏・五輪塔の集中が4個所に見られ、南からA・B・C・D地区と呼称した。

今回、特に盗掘を受けていた部分に等高線に直交して2個所、並行して1個所、1.5~2.0m×7.0m程度のトレンチを設定することにした。



第9図 本坊跡背後、調査地区



T.1, T.



盗掘跡の状況



本坊跡石塔台座



盗掘域に見える石積み



T. 2



T. 1, T. 2付近の石仏・石塔(1)



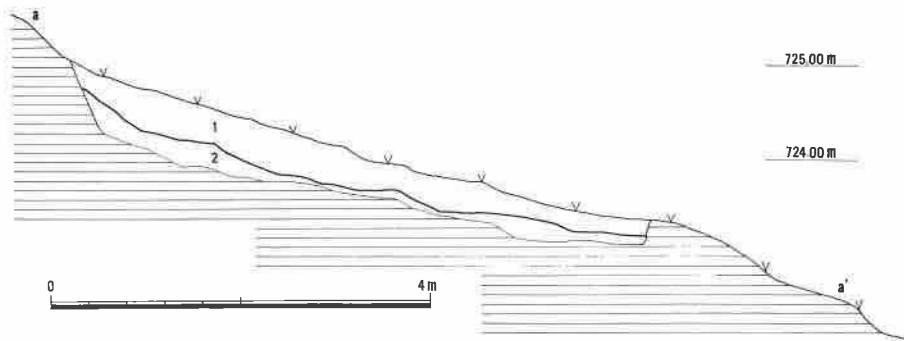
T. 1, T. 2付近の石仏・石塔(2)

## 4. 試掘調査

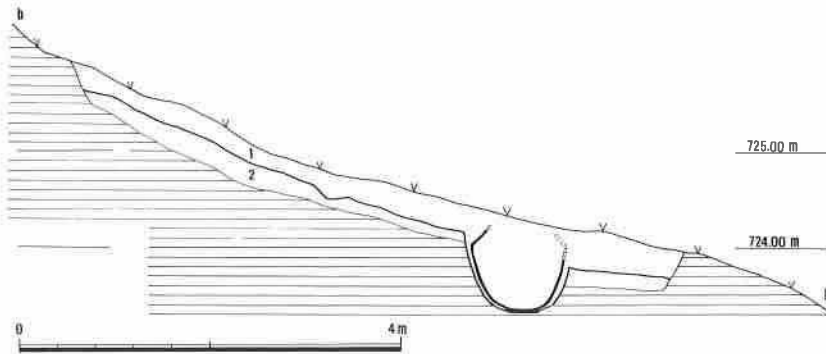
試掘トレンチは、南からT1、T2、T3と呼び、とり合えず等高線に直交するT1、T2から開始した。

T1、T2とも基本土層は同じで、第1層は約20~40cmの礫混じり茶褐色砂質土からなり、その下層はすぐ礫混じりの黄茶褐色砂質土の地山となる。ちょうどT1、T2ともトレンチ東端で上方からの自然地形がゆるやかになり、トレンチ西端から1mばかり更に西へ下ると傾斜がまた急になる。

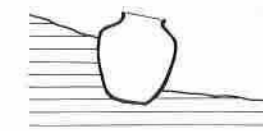
第1層は上方からの流土と盗掘による攪乱土と考えられた。



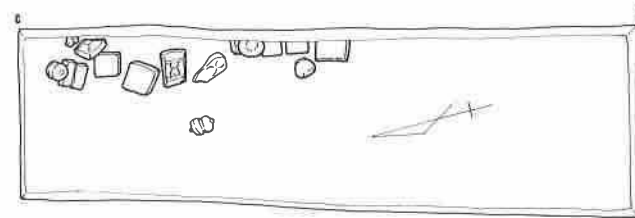
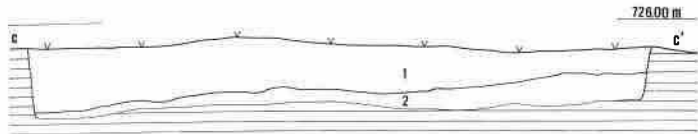
第10図 T1、南断面図 ( $S = \frac{1}{60}$ )



第11図 T2、南断面図 ( $S = \frac{1}{60}$ )



第12図 鉄釉三耳壺出土状況 (T2) (S=1/60)



第13図 T3、遺構図・断面図 (S=1/60)

T2 東端で鉄釉三耳壺が正立して、また西端近くで常滑大甕が検出された。大甕の口縁部は盗掘者によって打ち割られていたが、原位置は保っていた。

大甕内には人骨・灰・炭がつまり、木棺の飾り金具、および別個体の小形壺片が入っていた。木棺ごと火葬された後、それぞれの蔵骨器に収められていたものを、後に大甕にまとめて再葬したと思われる。

なお、人骨のあごの部分から数遺体分と推定された。

また大甕の底部近くは大きく欠損し、その部分には別個体の甕片が充填されていた。

T3と称したところは、盗掘を受けていなかったようで、厚さ40~60cmの礫混じりの茶褐色砂質土を除くと、石仏と五輪塔が横一列に並んだ状態で検出された。第1層は流土であり、それによってほとんど石塔等は倒れていたが、T3での様子から、本来は平坦に近いこの地区の東側山裾に全ての石仏・五輪塔群が横に並んでいたと推定された。



T.3. 石仏・五輪塔出土状況

T 3 の石仏などを除くと茶褐色砂質土となり、下部施設等は検出されなかった。

**出土遺物** 第14図のうち3・4・6・7はT 1、9はT 3、残りはT 2 出土品である。また10は表採品であるが、胎土・色調等から11と同一個体とされたので図示した。1と11を除くと全て攪乱土中から出土したもので、破片となったものが大半である。

1は鉄釉の三耳壺で、口縁部の一部を欠いているが、器形は肩衝茶入にやや似る。底部はロクロ右回転糸切りで、胴部下半には沈線が廻る。胎土には灰白色を呈するきめの細かいものを用いている。2も鉄釉を施し、胎土は白っぽい良好なものである。

3の頸部にはヘラ模様が一部残り、内外面共灰色を呈する。4は赤褐色、5は茶褐色を呈し、胎土には細砂を含む。6は花模様の押印が残り、茶褐色を呈する壺の肩部片である。

7・8共土師質の小皿であり、口縁部はやや肥厚気味で、共に微砂を含んでいる。9は乳白色の胎土をもち、微砂を含む良好な土からなる。



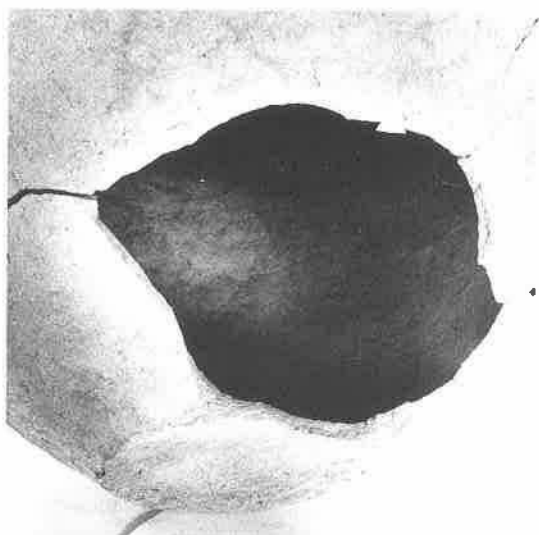
大甕出土状況



鉄釉三耳壺出土状況



大甕押印帯・刻印



大甕底部の穿孔

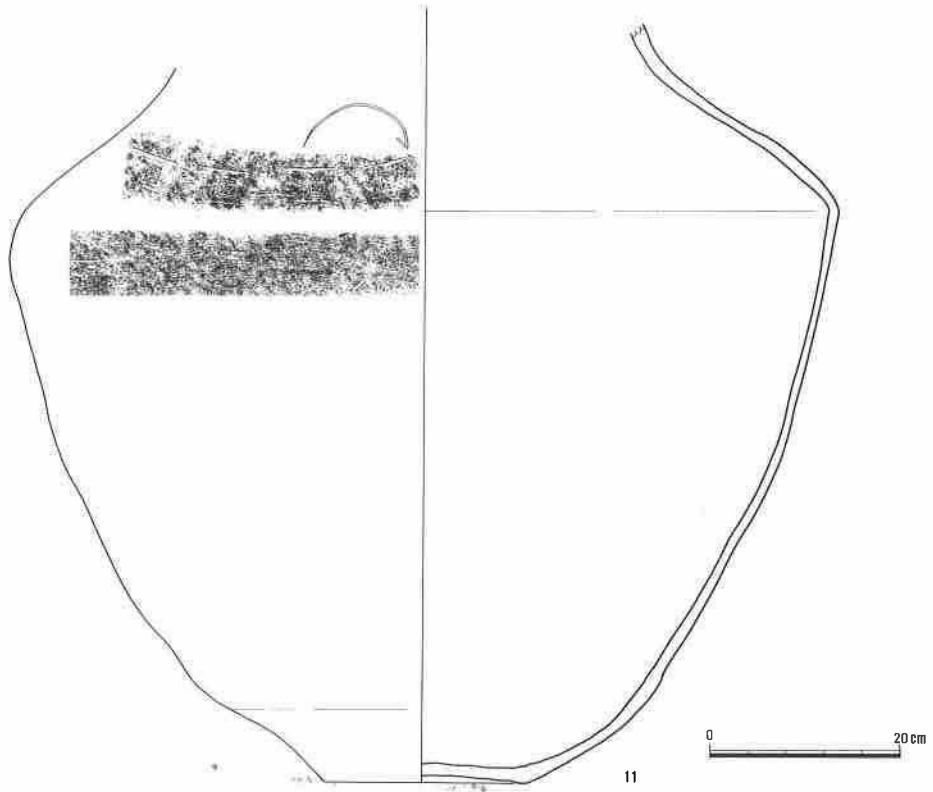
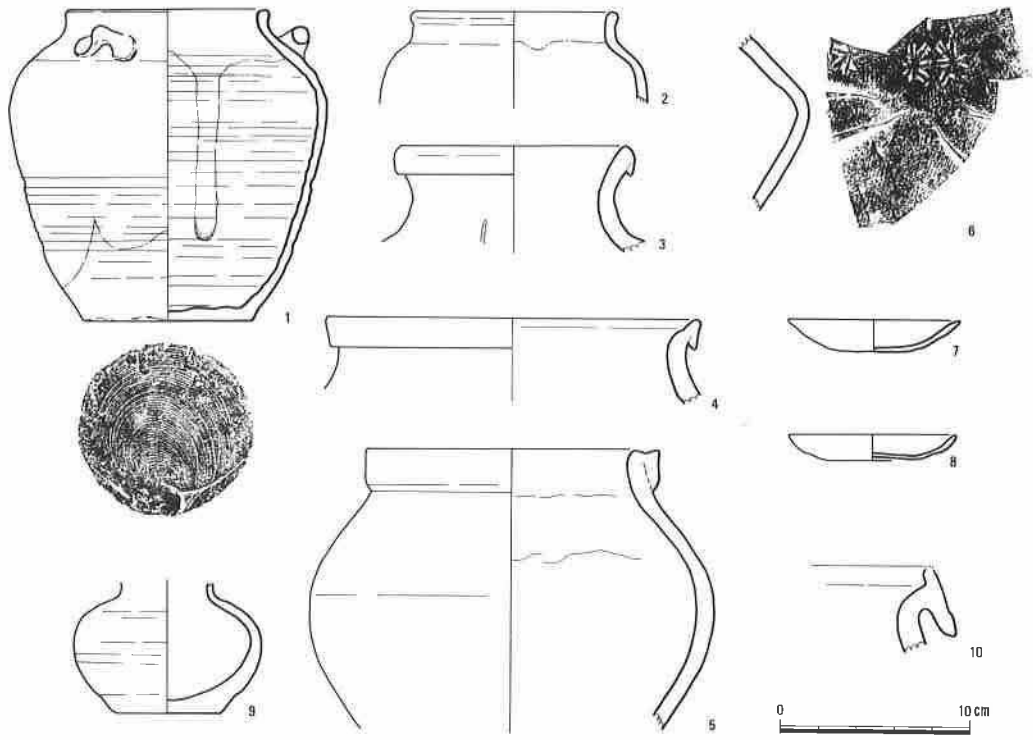


供養風景



調査風景





第14図 出土遺物

調査前

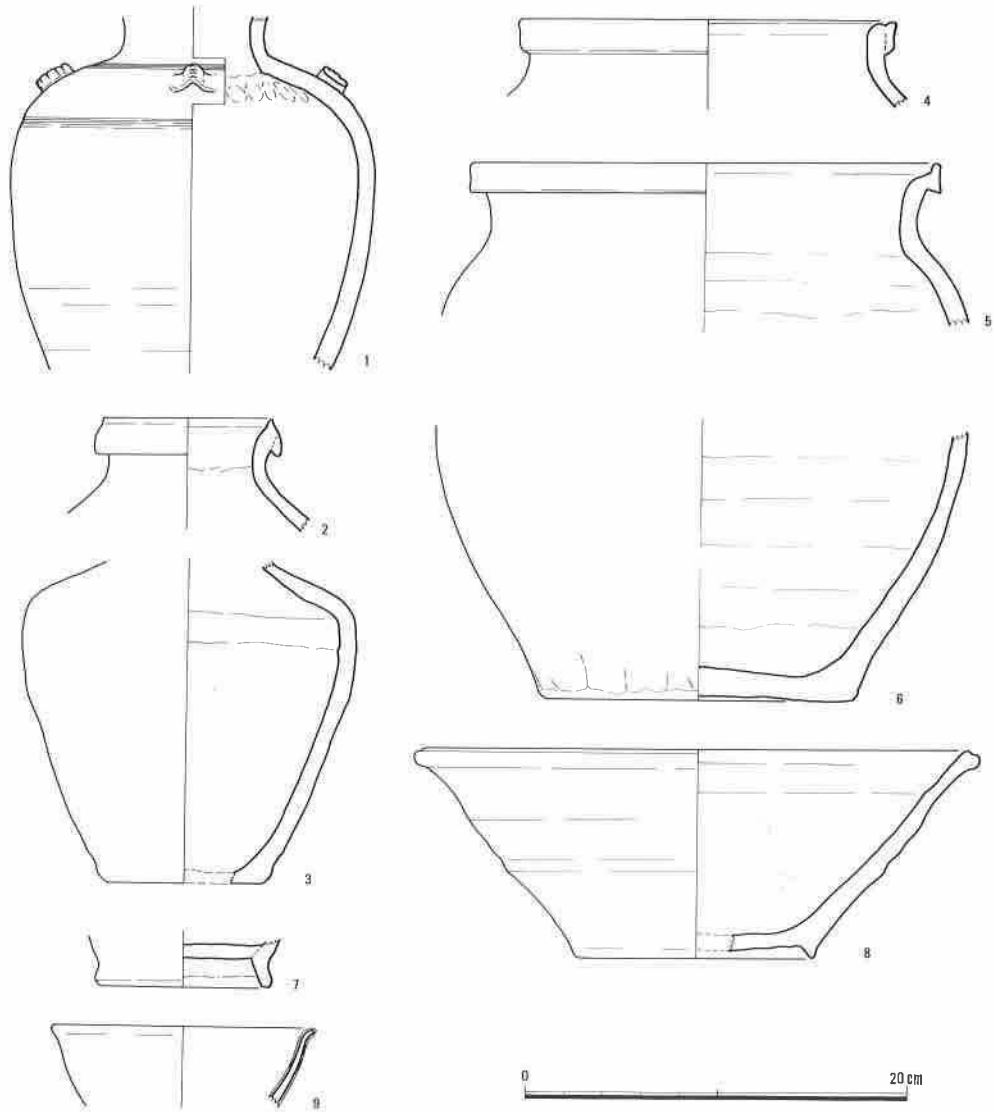
常滑



調査前の石仏・石塔



常滑・大甕



第15図 表採遺物

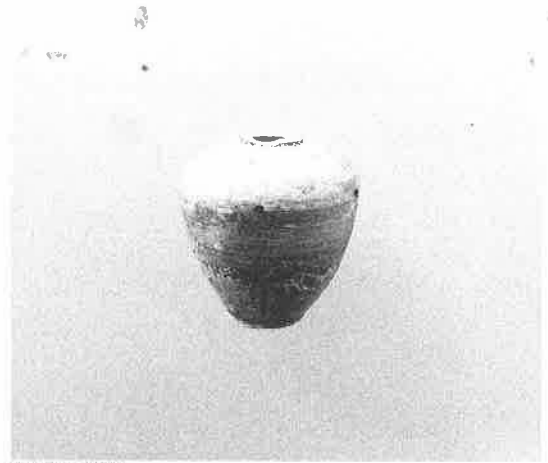
T.2

T.3

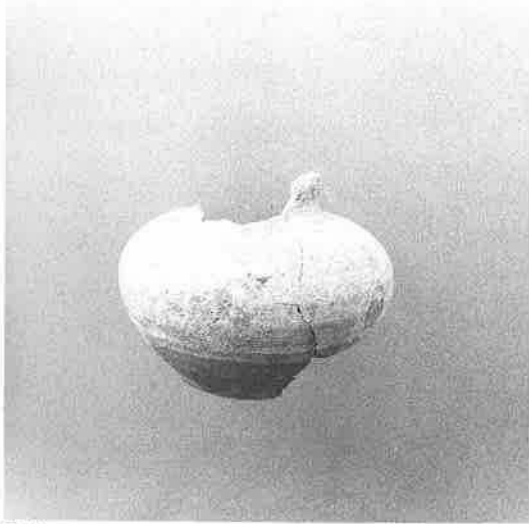
表採



T.2



T.2大甕内



T.3



表採



表採



表採

11の常滑大甕は、胴部に2段にわたり押印帯が残り、その上部に1個所孤状沈線が見られる。胴部最大径87.6cmを計り、高さは推定で約1mといったところである。頸部と胴部中ほどには乳白色のゴマハゲが残存し、胎土に2～3mm大の長石から5～6mm大の石ハゼ状を呈するものまで含まれている。外面は茶褐色を呈し、器壁は9～10mm程度と比較的薄いことなどから、14世紀後半の所産と考えられる。

第15図は全て表採品である。

1は四耳壺で肩に櫛描沈線が2単位あり、内面には指頭圧痕が残る。淡黄褐色を呈する。2は茶褐色を呈し、1～5mm大の細砂を胎土に含む。3は2と同一個体の可能性があり、石ハゼが認められる。4・5・6は共にチョコレート色に似た茶褐色を呈し、4の口縁部上面と肩にはゴマハゲが残存する。5は1mm大の砂をかなり含み、6は内面に粘土紐の継ぎ目がよく観察される。外面下端は下から上へ板状工具でなで上げている。

7は淡黄色を呈し、胎土は微砂を含み灰色を呈する。淡緑色の灰釉が外面にかかる。

8の常滑の鉢は口縁部上面に1条の沈線が施され、やや肥厚気味となっている。内面と外面下半および底部外面は横方向に削ったままとされている。2～10mm大の砂を大量に含み、内外面共石ハゼが多く見られる。内外面共灰褐色を呈する。9の青磁は龍泉窯系かと思われ精良な灰色の胎土からなり、釉の厚さ約1mm程度である。

出土した陶器類の大半は常滑が占め、ほぼ13世紀後半～15世紀のものであるが、14世紀代のものが中心をなす。

見ら  
胴部  
ハゼ  
的薄  
する。  
り、  
縁部  
の継  
。  
面と  
に含  
かと  
世紀



T.1. 出土遺物



T.2. 出土遺物



表採遺物

## 5. 弥高寺跡の評価——山岳寺院の一類型——

今回の分布調査によって、弥高百坊跡と言われてきた伊吹山支尾根上の一寺院の概要がある程度判ってきた。そして現在までのところ、この弥高寺跡がその規模・内容から伝えられる坊の数などいわゆる伊吹山寺関係寺院を代表するものであろうと推定されるに至った。こうした山岳密教寺院の一つで、ある程度その内容が知られている東浅井郡浅井町所在の大吉寺との比較の中で、弥高寺跡の特質をまとめてみることにする。

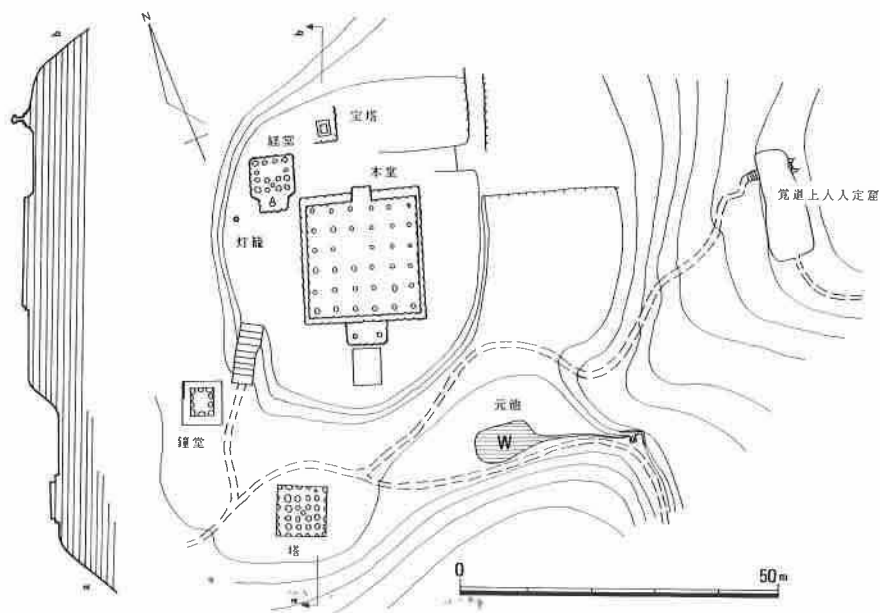
大吉寺は貞観7年(865)安然によって草創されたと伝えられる天台寺院で、『吾妻鑑』等で源頼朝がかくまわれていたことでも知られる。弘安8年(1285)の一切経安置の祈願文が残り、これは後に完備され、また49院を誇ったといわれる。

そして大永5年(1525)六角定頼の兵火、元亀3年(1572)織田信長による攻撃等で焦土と化し、衰退していったものである。

なおこの遺跡は、すでに昭和48年、県指定史跡となっている。

弥高寺跡は、東西約250m・南北約300mの範囲に、本坊跡を頂点の位置として極めて計画的に、方形を基本とする坊跡が60近く配されている。いわゆる本坊跡も、最大約68×約59mを計る広大なもので、これがこの寺院の中心をなすことは、その位置・規模からも明らかである。このことは中心に最大東西幅約60m・南北約50mを計る本堂ののる郭、および現在48を数えるその周囲の坊跡を備える大吉寺跡とほぼ同規模であるといつてよい。

ただ三方に張り出たそれぞれの尾根に坊跡が張り付く大吉寺跡より、全体として弥高寺



第16図 浅井町大吉寺跡本坊付近





弥高寺跡では、その本坊跡の北半は1段高い基壇状を呈しているが、ここでその直角に交わる東辺と南辺を生かすと18×18m四方の建物を想定することができた。相方とも「本堂」はほぼ南面する。本堂あるいは本坊から東へ下ったところに池を配し、更にその東に入定窟を備えていることなども一致している。

またその入定窟は両者共、同様の規模で、前室を備え、奥に小室を設け像を安置するところまで酷似している。池は本堂近くの谷に近いところに位置し、相方とも径5～8m前後を計るのである。

奈良時代ごろから山岳信仰と仏教信仰が結合し、僧が奥深い神の住む霊山で修行を行う山岳修行が起ったが、当初、朝廷からの圧力が加えられた時期もあった。

しかし奈良時代末から平安時代初頭以後、こうした山岳で修行を行った僧が評価されるようになり、多くの山岳寺院が創建されていった。近江ではこの伊吹山寺や後に大吉寺となった天吉山寺をはじめ、伊叡山寺、己高山寺、金勝山寺がよく知られているところである（第1図参照）。

こうした山岳寺院がその後展開し、伊吹山寺の場合は伊吹四大寺、比叡山寺だと三塔十六谷、己高山寺の場合は己高山五箇寺として石道寺・法華寺といった形で知られるようになり、それぞれ弥高百坊とか比叡山三千坊、あるいは大吉寺四十九院、法華寺百二字という具合に多くの院や坊を従えていくのである。

これらは標高500～700mの高い山上に位置しながらも、寺院建物は山を背にすることが多い。脇には水の手があり、大規模な本堂と比較的小規模な数十の坊跡群から構成される。また行者谷あるいは入定窟といった修行の場や池も設け、寺院の入口には「仁王門」あるいは「大門」と呼ばれる門がある。また墓地も近接した地に築かれ、決して日常雑器類ではない蔵骨器が用いられる。そして五輪塔・石仏等をもってその標式とする。

このような山岳密教から展開した中世の山岳寺院の中で、弥高寺は大規模で最もまとまりのある典型的な例であろう。

今回の小規模な試掘と土器類を表採した結果、本坊跡の背後に位置する墓地からは、13世紀後半～15世紀末か16世紀初めごろまでの遺物しか得られなかった。

このことは、特に『大原観音寺文書』を中心とする文献資料においても鎌倉時代後半から室町時代にかけての伊吹山寺関係の文書が多く残ることとも符合し、墓地の一部からの結果に基づくと、弥高寺は永正9年(1512)6月の兵火により焼失したのち、山岳寺院としての機能は失われ、その大半は麓へ下ったのではないかと考えられる。

その後の『伊吹大薩菩奉加帳』等に見られる弥高寺関係の坊名等は麓のそれを指すと考  
えられるが、このことは今後の継続的な調査によって次第に明らかになるだろう。

ただ現在の弥高寺跡は、その寺域部分だけ雑木等はほとんどなく、また本坊跡の地目は  
宅地となっていることなどから、衰退後も何らかの寺関係の施設があり、管理されていた  
ものと推定しうる。

なお、弥高寺跡を上平寺城（桐ヶ城あるいは刈安尾の城）に比定する説がある<sup>5)</sup>。このこ  
とについては、すでに小和田哲男によって適切な評価がなされている<sup>6)</sup>。

古くから寺院に城としての機能を持たせたことはしばしば見うけられ、またこの弥高寺  
も寺としていく度が戦乱にかかわっている。土塁、大門跡の虎口としての形状、あるいは  
本坊跡西側斜面には竖堀、また本坊跡背後の尾根には堀切も2条認められる。しかし郭状  
遺構等の配置・規模など、その構造の基本はあくまで寺院そのものであり、小和田の指摘  
のように、今後、どの部分が京極氏による改造箇所なのかを見分けることが、難しいこと  
ではあるが必要な作業になってくるだろう。

#### 註

- (1) 「平安朝時代」・「墳墓志」・「寺院総説」・「廃寺」『改訂近江坂田郡志』1941年  
宇野茂樹「伊吹山寺」『柴田實先生古稀記念日本史論叢』1976年  
樋口元ほか『伊吹山寺』（『伊吹町文化財』第2集）1977年  
滋賀県教育委員会「大原観音寺文書調査概要」『大原観音寺文書』1975年
- (2) 註(1)の宇野論文 236頁
- (3) 「墳墓志」『改訂近江坂田郡志』第3巻には、「役行者岩窟前に古塔二基あり」と記されている。
- (4) 柏倉亮吉「大吉寺趾」『滋賀県史蹟調査報告』第6冊 1934年
- (5) 長谷川銀蔵・長谷川博美「上平寺城跡」『近江の城』第16号 1985年 1～12頁
- (6) 小和田哲男「京極氏の内訌と上平寺城」『近江の城』第16号 1985年 15頁

伊吹町文化財調査報告書 1

## 弥高寺跡調査概報

昭和61年 3月31日 発行

編集・発行 坂田郡伊吹町春照491

伊吹町教育委員会

印刷 京都市下京区油小路仏光寺上ル

有限会社 真陽社

